

がん診療の場において、治療に付随した「副作用マネジメント」を取り入れることは、もはや必要不可欠となっています。

現在、副作用という言葉は、主作用に対する副作用を意味する「side effect」ではなく、意図しない有害な反応である「adverse drug reaction (薬物有害反応)」という意味合いであることがほとんどです。

患者の苦痛緩和・治療遂行という点において、その有害性は重要視されて然るべきです。

しかし、その判断基軸だけでは「みえない副作用」があるのです。

そこで本特集では、「みえない副作用」と題して、「医療者——患者間の認識ギャップ」「アセスメントの難しさ」「副作用を言い出せない患者の心理的側面」といった着眼点から、これまで取り上げられてこなかった副作用の側面に迫ります。

Feature February 2017 Topic

みえない副作用

みえない副作用——この5年で変わった副作用の評価基軸
岡元るみ子(千葉西総合病院 腫瘍内科)

みえないものをみる——認識からはじめる「みえる化」アプローチ
川上和宜(がん研有明病院 医療安全管理部/薬剤部)

患者にもみえない副作用——コミュニケーション・認知・ここからひもとく
早川昌子(相原病院 プレストセンター/関西労災病院)

みえない副作用に患者も困っている
桜井なおみ(キャンサー・ソリューションズ株式会社)

認識ギャップでみえない副作用——しびれ(末梢神経障害)
田辺裕子(虎の門病院 臨床腫瘍科)

認識ギャップでみえない副作用——眼障害
五嶋摩理(がん・感染症センター都立駒込病院 眼科)

認識ギャップでみえない副作用——味覚障害
田頭尚士(岡山医療センター 薬剤部)

患者が言い出しにくい副作用——排便機能にまつわる諸問題
豊原敏光・高木良重(医療法人福西会 福西会病院 大腸肛門病センター)

患者が言い出しにくい副作用——性機能・性行為
渡邊知映(上智大学 総合人間科学部看護学)

みえない部位の副作用——口腔内
鷹野 理(三井記念病院 薬剤部、緩和ケアチーム、化学療法室、がん診療センター)